

怪人二十面相と鉄人28号

大幸信明

母校の小学校がホテルになった。すでに他の小学校との統合で廃校になっていたが、その跡地利用ということでホテルに転用された。ただし、明治初期のルネッサンス様式の歴史ある校舎の外観はそのまま保存され、校庭もイベントスペースとして活用されるという。一度その様子を見ておこうと、出かけることにした。もともと、母校に通っていたときは違い、今は京都市でも宇治市に隣接する伏見区だ。

小学生の頃は学校まで子どもの足で十分ほどの四条河原町から少し中に入ったところに住んでいた。住所でいえば、京都市中京区新京極四条上ル仲之町だ。いわゆる「田の字地区」で、歴史と伝統を重んじる文化都市の京都市民としての意識が高いといわれる。

久しぶりに「登校」するのだからと、昔通り実家からの通学路を通って行こうと思った。今は売り払ってファッションビルになっている実家の跡地前から柳小路を通り第二京極から裏寺へ出る。裏寺を上がって蛸薬師を東に。河原町通りを渡ってそのまま蛸薬師を東に入っていくと、高瀬川から木屋町に出るまでに通用門がある。児童はこの通用門から登校した。ただし、今は閉鎖されている。

高瀬川沿いにある正門を見て、ぐるりと周りを見渡した。面影は残ってはいるが、やはりホテルはホテル。小学校とは雰囲気まったく違う。とはいえ、よくここまで残してくれたと感慨深く見て回った。

帰りも足が覚えている通りに同じ道を通る。いつも見たバーがまだ残っている。「ワインリバー」。小学校の頃はその意味がわからず、ワインリという名前のバーかと思っていた。場所柄、バーだけは分かった。河原町に出るところには昔は丸善があった。本や文房具の店で、高級品ばかり揃えていたので、子供が入る店ではなかった。今はカラオケ店になっている。再び河原町を渡る。渡った角に小さな本屋さんがあって、その横が輸入食品の店。普段見慣れない商品が一杯あったが、子どものこづかいで買えるものはなかった。前を通るだけだった。その次がまた本屋さん。「ミレー書房」……と思ったら、そのあたり一帯はフェンスで囲まれていた。フェンスには大型商業施設の建設予定地とある。これもそうか。この河原町通り一帯は変化が激しく、昔の面影はほとんどない。子どものころ過ぎたわいわい私のふるさとなのだが、懐かしさは訪れるたびに薄れていく。商業地域ゆえ

の宿命ではあるが、さびしい限りだ。

もっとも、河原町通りから少し中へ入った、いわゆる田の字地区は、古くからの街並みも多く、創業何百年という老舗も多く、京都らしさが残るところで、その対比がはなはだしい。歴史をかたくなに守る一方新奇なものも進んで取り入れる。京都らしいといえれば京都らしい。

ミレー書房のあったところを前にして、昔のことを思い出した。

そのころ、僕は本を読むのが大好きな少年だった。学校の図書室にもよく行った。図書室の先生が四年生にはまだ早いという漢字ばかりの本も、なんとか読むことができた。学校の帰りには本屋さんで色々な本を立ち読みするのが好きだった。本屋さんは何軒かあったが、おじさん一人が奥で店番をしている「ミレー書房」という小さな本屋さんへよく行った。

ある日、本棚に並んだ「少女文庫」の中で「怪人二十面相」という変わった題名の本が目に入った。いつものように立ち読みで読んでみた。たちまちその面白さに引き込まれ、壁の時計を見ればいつも家に帰る時間をだいぶすぎていた。遅くなるとお母さんが心配するので、その日は読むのをやめて帰った。

次の日も「怪人二十面相」の続きが気になり、学校の帰りにミレー書房に飛び込んで続きを読みだした。気が付けば、また遅くなっていたので、帰ることにした。

そんな日が一週間ほど続いた。最初は立ち読みしていたけど、途中からはお店の人に見えないよう本棚の陰で体育座りで読んでいた。その日の分を読んだ後は、次の時にすぐに続きが読めるよう、鉄人28号のしおりをそっと挟んでおいた。

そうして毎日のようにミレー書房で「王子と乞食」を読んでいた。いつもミレー書房に入る時には、あの本が売れてしまっなくなってないか心配だった。箱に入って表紙も厚紙の丈夫な本で、値段も高いからすぐには売れないだろうと思ってはいたけど、本棚に残っているのを見ると安心して嬉しかった。

ある日のこと、いつものように本を読んでいた時、なんだか後ろに人の気配がした。振り返ってみると、店番のおじさんだった。

「僕、毎日読みに来てるけど、その本そんなに好きなんか」

僕は、叱られるかと思いつながら、黙って首を縦に振った。おじさんはにこにこ笑っていた。「それなら、その本持って帰ってもいいよ」

僕はおじさんに前から見つかっていたのを知って、びっくりした。持って帰っていいといっても、そうしたらお母さんに叱られそうな気がしたので、咄嗟にこう言った。

「ううん、この本はお誕生日のプレゼントで買ってもらうから」

おじさんは、少し驚いたような顔をしたが、すぐにニコニコ顔になった。
「そうか、じゃあそうするか」

おじさんはそのまま奥へ入って行った。
その日は、すぐに家に帰った。

毎日この本を読み、本屋さんに寄り道しているのは、お母さんには言ってなかった。言えど叱られるだろうし、そうしたら王子と乞食の続きも読めなくなると思った。

誕生日に買ってもらうと言ったけど、誕生日は来月だ。それまでに売ってしまったらどうしようかと心配になった。学校の図書館にも同じ題名の本はあるけど、お話はもっと簡単にしてあって、あまり面白くなかった。

毎日下校の時にはミレー書房の前を通る。「怪人二十面相」はまだあるだろうかと心配しながら、でも、おじさんに見つかってしまったのでそれからは入りにくくなり、そのまま前を通り過ぎていた。

お誕生の前になって、お母さんがプレゼントに何がいいか聞いてきた。僕は、「怪人二十面相」の本が欲しいと言った。お母さんは、それなら大きな本屋さんで探してくるといったけど、僕はミレー書房で買うようにお願いした。お母さんは不思議そうな顔をしていたが、いいよと言ってくれた。

お誕生日にお母さんとミレー書房へ行った。僕が読んでいた本は、まだ本棚にあった。僕はその本を取り、お母さんに渡した。お母さんは、おやつという顔をしたが、そのまま奥のおじさんのところへ持っていった。

「やあ、今日が誕生日か。忘れずに来てくれたんだね」

おじさんは嬉しそうに言って、その本を持って奥に入ってしまった。

「誕生日のプレゼントだから、綺麗な紙で包んでおいたよ」

おじさんはそう言って、綺麗な紙で包んでリボンをかけた本を渡してくれた。

お母さんが不思議そうな顔をしているので、

「僕ちゃんがね、この本を気に入って毎日のように読みに来てね。誕生日には買ってもらうって言ってたんで、待っていました」

笑いながら、お母さんに言った。

「まあ、それは済みませんでした。ご迷惑だったでしょう」

おじさんは、いやいやと手を振って、笑っていた。

帰ってから、ワクワクしながら包装を開けた。中から、見慣れた、でもまだ一度もページを繰ったあとがない新しい本が出てきた。僕が毎日のようにミレー書房で読んでいた、読んだ後の黒い筋が残る本ではなかった。新しい本は嬉しいけど、やっぱり今まで読んで

きた跡のある本の方が良かった。続きを読もうとして、いつも挟んでいた鉄人28号の葉がないことに気が付いた。気に入ってたのに。あの読みかけの本は、鉄人28号の葉はどうなったのかなあ。

